

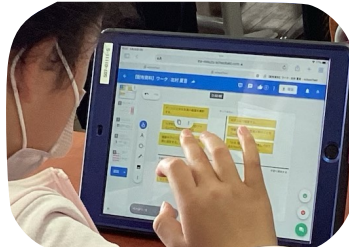
窮屈なルールを減らし、モラルとマナーを大切に

学習用iPadの操作スキルが高まる高学年。その一方で、情報モラルが追いついておらずiPad関連のトラブルが起こることも多くあります。「道具に使われるのではなく使いこなせる人になる」という学習用iPad利用の目的を明確にして、デジタル・シティズン（デジタル市民）を目指すよう働きかけるチャンスです。

伊那市地域おこし協力隊の浅利美美さんは市内の小中学校を訪問して「ICTリテラシー教育」の出前授業を行い、担任の先生や子どもたちと一緒に上手なICT活用について考え合っています。



①これからみんなで目指す「デジタル・シティズン」とは何かを学びます。授業で使う「ルール/モラル/マナー」を定義してそれぞれの違いを理解します。



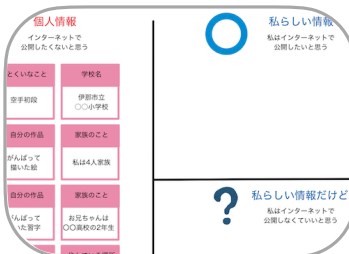
②「〇〇は学習に関係する？ しない？」と、iPadを使うさまざまな場面を、自分で考えてポジショニングマップに配置。共同閲覧モードで他の人と見比べます。



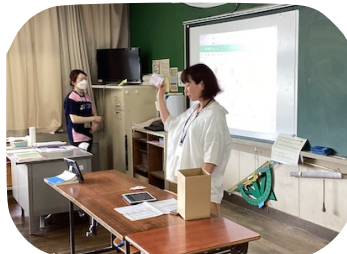
③iPadに使われるのではなく使いこなせる人になるには、モラルとマナーと知識が大敵だと理解します。



④「個人情報って何？」スクールタクトで個人情報ビンゴを楽しみます。「3つ合わせたら誰かが特定してしまう情報もある」と気づきます。



⑤一方、個人を特定しない「私らしい情報」についても考えます。自分らしさを表現することで世界を広げられるのもインターネットの特長です。



⑥今日の話を振り返ります。「足を止めて考えること」「判断ができないときや自信がないときは、先生や大人に相談すること」を確認しました。次回に続きます。

地域おこし協力隊の浅利美美さんが、美篤小学校で行った出前授業の様子をもとに推進センターで編集させていただきました。

伊那市では、「学校教育情報化ビジョン2021」をもとに、iPadを導入して「ICT活用教育」を推進しています。

伝統的
学びを深めるICT活用

先進的
学びに導くICT活用

「Society5.0」時代の
学びを支える教員

個別最適な学び・対話的学び
創造性を育む学びの実現

デジタル・シティズンシップ教育はあらゆる機会に

私たちは「未来を生き抜く子どもたちに、テクノロジーの善き使い手となり、日々の学びや生活に役立てて欲しい」と願っています

そのためには、テクノロジーの特性を良く理解し、社会の中で安全に、責任を持って、お互いを尊重する使い方を身につけることが大切です。

このことを実現するための教育を「デジタル・シティズンシップ教育」といいます。



しかし、「デジタル・ネイティブ」と呼ばれる児童生徒たちであっても、新しいテクノロジーが生活にもたらす影響について、市民・社会の一員として理解できているとは限りません。また、テクノロジーの恩恵を受ける人と、いじめ、ネット荒らし、過激化の犠牲になる人との間に格差が広がっています。

学校教育は、「若者がインターネットのリスクや落とし穴から身を守るだけでなく、有能なシティズンとして、社会のためにデジタル技術を積極活用する方法を理解させ、若者たちの能力習得を支援する」重要な役割を担っています。

デジタル・シティズンシップは、スキル・知識のみならず、価値観・態度も含まれます。そのため、学校でのデジタル・シティズンシップ教育は、カリキュラムの教科指導の前提となる教育であるという認識が必要です。

※「インターネットやデジタル機器がある環境で生まれ育った人」の総称



今回の出前授業について浅利さんに聞きました

「〇〇してはいけない」というルールで自由や可能性を奪うのではなく、「〇〇できるようにしたい」と自分自身で考えるきっかけになるように、先生方と相談しながら授業案を作成しています。今回の授業では、4択クイズや、カードをグループ分けするポジショニングマップ、ビンゴゲームなど、スクールタクトの機能を活用しながら楽しく学んでもらえるように工夫しました。

デジタル・シティズンの道も一歩から。学年・学級に合ったアプローチで継続的に行っていきます。